

中度知的障害児の疑問詞（「どこ」、「だれ」）に対する応答訓練

谷 晋二

（発達教育研究所アトム、薫英女子短期大学）

WH型の疑問詞に対する応答を獲得する事が中度・重度の知的障害児には困難である事が指摘されており、またその臨床的重要性も指摘されている。本研究では、1名の知的障害児に疑問詞（「どこ」、「だれ」）に対する応答反応を指導し、概念学習の観点から、考えてみた。

対象児 養護学校中等部に通学する知的障害児（11才）で、意味不明の奇声をあげる事もあるが、2～3語文で要求を伝えたり、見た物を報告するために使用する事ができる。5才から応用行動分析による指導を筆者が実施している。これまで、平仮名の読み書き、数の学習、大小概念の学習などを行ってきた。音声刺激による学習が非常に困難で、音声刺激による平仮名の選択、音声刺激による大小弁別には長期の訓練が必要であった。対象児は、絵カードや写真を見て、「公園」、「学校」、「〇〇さん」などと場所の名前や人の名前を言う事ができた。また、平仮名や漢字を読んで、場所や人物の絵や写真を選択する事や、それらの絵や写真を見てその名称を書く事もできた。K式発達診断検査での発達指数は認知適応42、言語社会41であった。てんかん発作があり現在服薬中（テグレート）である。

手続き

刺激教材 場所の名前が書かれた文字カード2種類（場所の名前カード）と人の名前が書かれた文字カード2種類（人の名前カード）、「場所」、「人の名前」と書かれた文字カード。「どこ」、「だれ」と書かれた文字カード。

ベースライン 「〇〇さんは、〇〇へ行きました」という短文を話し言葉で聞かせ、復唱させる。その後で「どこへ行きましたか？」あるいは「誰？」と尋ねた。正しい回答に対しても、誤った回答に対しても「はいじゃうず」という受け答えをした。

分類訓練 訓練者と対象児は机の前に対面して座り、対象児の前に「場所」と「人の名前」と書かれたカードを置く。その後、場所の名前カード2枚と人の名前カード2枚（セット1、教室・プール、山田・田中）をランダムに手渡し、「場所」、「人の名前」カードの下に置かせる。正しく置けた場合は、握手や拍手、ほめ言葉等で強化し、まちがった場合には、「違うよ」といって訂正させた。強化あるいは訂正させたあとで、置いたカードを撤去し、次のカードを呈示した。1セッションを8試行とし、連続3セッション中の2セッションで100%の正反応率が達成された時点で、「場所」、「人の名前」カードと「どこ」、「だれ」カードとのマッチング訓練を行った。

マッチング訓練 マッチング訓練は分類訓練と同じように対面して座り、対象児の前に「場所」と「人の名前」と書かれたカードを置き、訓練者は「どこ」あるいは「だれ」と書かれたカードを呈示し、「場所」あるいは「人の名前」と書かれたカードを選択させた。正しく選択できた場合は、握手や拍手、ほめ言葉等で強化し、まちがった場合には、「違うよ」といって訂正させた。達成基準は8試行連続正反応とし、達成基準達成後、「場所」あるいは「人の名前」の刺激統制が「どこ」、あるいは「だれ」カードへ転移しているかどうかを調べるため、転移ブロープを行った。

転移ブロープ 対象児の前に訓練1で用いた場所の名前カードと人の名前カードを各1枚ずつ置き、対象児に「どこ」、あるいは「だれ」と書いたカードを呈示しながら（訓練者は「どこ」あるいは「だれ」と言いながら）、選択させた。正しい回答に対しても、誤った回答に対しても「はいじゃうず」という受け答えをした。

この転移ブロープで80%の正反応率がえられた場合、新しく、場所の名前カード、人の名前カードを導入し（セット2、集会

所・病院、松田・長島）、分類訓練、転移ブロープを行った。セット2の訓練が終了した時点で、ベースライン条件と同じ条件で、音声刺激による「どこ」、「だれ」疑問詞に対する応答をテストした。

結果

図1に示したように、セット1の分類訓練はゆっくりとした学習を示し、その後のマッチング訓練は12試行で8試行連続正反応という達成基準に到達した。「どこ」、「だれ」カードを呈示してのブロープテストでは、100%の正反応が得られた。セット2では、8セッションの分類訓練で基準に到達し、転移ブロープでも87.5%の高い正反応率が得られた。しかし、文字カードを使わないベースライン条件での、音声刺激による応答テストでは37.5%の正反応しか得られず、音声での応答は困難であった。

そのため新しい刺激セット（セット3、動物園・レストラン、上田・青木）を用いて、同様の訓練を行った。分類課題の学習は次第に速くなっていき、転移ブロープでも100%の正反応率が得られたが、ベースライン条件での応答テストのパフォーマンスは向上しなかった。

移行訓練

そこで、音声刺激へ刺激統制を移行させるため、セット3を用いて遅延プロンプトを用いた移行訓練を行った。この訓練では、最初に訓練者が場所の名前（例えば動物園）と人の名前（青木）の書かれたカードを見せながら、「〇〇さんが〇〇に行きました」という問題文を口頭で呈示し、その後で「どこ」あるいは「だれ」と質問し、正しいカードを選択させた（ステップ1）。ステップ1が6試行連続で正しく選択されたら、ステップ2へ移行する。ステップ2では、ステップ1と同様に口頭で質問するが、場所の名前（人の名前）カードは裏向きで机の上に置かれ、口頭で返答する事を求めた。正しく返答する事ができない場合や無反応の場合には、カードを裏に返して返答させた。ステップ2で6試行連続正しく返答できた場合には、ステップ3に入った。ステップ3では、カードは使用せず、問題文も返答もすべて口頭でなされた。すべてのステップで正反応のときには握手や拍手などで強化した。訓練セッションは毎回ステップ1から開始され、順次ステップ3まで行われた（ただし、第2セッションからはステップ2から開始し、ステップ2の正反応率が80%以下の時にはステップを下げて行う事にした）。

結果 図2に示したのは、ステップ3条件での、口頭質問に対する正しい応答反応の正反応率である。訓練開始後4セッションで音声のみの口頭質問に100%正しく応答できるようになった。しかし、新しい刺激セット（セット4）に対しては、50%の正反応率でしか応答する事ができなかった。セット4の刺激に対して分類訓練を行ったところ、「どこ」、「だれ」刺激への転移が見られ、移行訓練では最初からステップ2は100%の正反応率を示し、ステップ3でも100%の正反応率となった。しかし、新しい刺激セット（セット5）に対してはまったく応答する事ができなかった。セット5では最初に「銀行は場所の名前だよ」と教示を行ってから、分類訓練を行ったので分類訓練は最初から100%正しく分類できるようになった。セット4と同様に「どこ」、「だれ」刺激への転移が見られ、移行訓練では最初からステップ2は100%の正反応率を示し、ステップ3でも100%の正反応率となった。

考察

本研究の手続きでは、学校や公園などの名称を「場所」という言葉の刺激統制下に置き、また、「田中」「青木」などの名称を「ヒトの名前」という言葉の刺激統制下に置くために分類

訓練を行っている。これは、くだものという刺激によってイチゴやりんごが選択できるようになる事と同じ様に、機能的な等価クラスを形成する事である。さらに、「どこ」あるいは「だれ」という疑問詞が「場所」「人の名前」とマッチングされることによって、「どこ」あるいは「だれ」という疑問詞によって、所属クラスのメンバーを選択できるようになった。

しかし、新しい刺激セットに対しては分類学習が必要であった事から、対象児はこれまでの言語学習において、場所・人の名前などのクラス概念が未形成であったと考えられる。分類訓練のセット数が増えるにつれて、学習速度が速くなる傾向を示しているので、場所・人の名前というクラス概念の学習セット

ができつつあると考えられるかもしれない。

音声刺激によるテストでは、まったく「どこ」、「だれ」という音声刺激への刺激統制の移行は見られなかったが、移行訓練を行う事によって、音声による「どこ」、「だれ」への応答ができるようになった。セット3の刺激に対して、音声での応答ができるようになった後では、クラスへの分類ができるようになっただけで、音声による応答も可能になった。

